

6. 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
7. あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
8. あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
9. それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
10. わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
11. あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
12. 安息日を守って、これを聖なる日とせよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。
13. 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
14. しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘も、あなたの男奴隷や女奴隷も、あなたの牛、ろばも、あなたのどんな家畜も、またあなたの町囲みのうちにいる在留異国人も。——そうすれば、あなたの男奴隷も、女奴隷も、あなたと同じように休むことができる。
15. あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。
16. あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。それは、あなたの年齢が長くなるため、また、あなたの神、主が与えようとしておられる地で、しあわせになるためである。
17. 殺してはならない。
18. 姦淫してはならない。
19. 盗んではならない。
20. あなたの隣人に対し、偽証してはならない。
21. あなたの隣人の妻を欲しがってはならない。あなたの隣人の家、畑、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

## 説教

10月31日は宗教改革記念日です。1517年10月31日、マルティン・ルターは、ローマ教会の免罪符販売に反対して神学者に討論を呼びかけた『95箇条の提題（公開質問状）』をヴィッテンベルク城教会の扉に貼り付けます。こうして宗教改革が始まりました。プロテスタント運動がヨーロッパに起こります。宗教改革の伝統を重んじるプロテスタント教会では、10月31日の直前の主日に「宗教改革記念礼拝」をささげるのですが、赤羽聖書教会でもどうかと思って、取り敢えず今日は宗教改革の話をすることにします。聖書箇所をどこにしようか考えたのですが、折しも十戒の箇所を学んでいるところだったので、十戒との関わりに於いて、宗教改革者の残した霊的遺産を共に

学びたいと思います。

十戒は二枚の板に記されました。神が直接その指で二枚の石の板に十戒を刻まれたのです。内容は、一枚目の板に記されたと思われる前半五つが「神を愛する戒め」で、後半の五つが二枚目の板に記されたと思われる「人を愛する戒め」です。すなわち、十戒を一言で要約すると、神と人を愛する戒めです。これは神のみこころの全体でもあり、人が神と人ともに負うところの責任の全貌と言えます。

宗教改革者たちは、この十戒が、個人の倫理基準となるのみならず、国家の政治の基準にもなると考えました。例えば、カルヴァンは、国家を政治的に統治する為政者の責任を「律法の二枚の板全体にわたるものである」と言います（カルヴァン『キリスト教綱要（IV/2）』20章9節）。それは、要するに「神と人を愛する政治」をすることになります。前半の「神を愛する政治」と言っても、カルヴァンの時代には「正しい神礼拝を確立する」ことは、具体的には、カトリックの信仰を排除して、プロテスタントの信仰を「保護育成する」ことが為政者の責任とされました。でも、今日に於いては、このことは為政者が政教分離の原則を尊重して、国民の信教の自由を守ることになるでしょう。後半の「人を愛する政治」とは、統治者には、「貧しい者や乏しい者に正義を行い、窮迫し、困窮した者を解放し、貧しい者、乏しい者を虐げる者の手から救い出す」ために、統治者は暴力を抑制し、社会の平穏を乱す悪人や犯罪人を厳しく罰する責任があるとカルヴァンは考えました。こうして、法と正義を人々に命じることによって、統治者は社会のうちに平和と平穏を保ちます。それで、内外の悪から国民を守るために、統治者には剣の権能が許されました。つまり、国民一人一人の平穏に生存する権利を守ることが統治者の責任なのです。このように、宗教改革者は、神と人を愛する政治をすることを為政者の責任と考えました。十戒を政治と結び付けて国家のあり方を考えたのは、宗教改革者の貴重な功績だと思います。

私たちは、十戒は十戒として、宗教上の倫理として学びます。そして、政治は政治として、聖書とは別物として多くの者は考えます。もしそう考えるならば、私たちキリスト者は、この世の政治についてどのように考えたらよいのでしょうか。聖書はどのような社会が理想だと教えているのでしょうか。

ある者は、統治者は統治者として思いのままに自分勝手に治めて、教会がそれに口を挟まないのが良いと考えます。たとえ暴政圧政となっても、それで罪人はおのれの罪を深く思い知らされて神のもとに罪を悔い改めるようになるからです。でも、教会はそれでいいのでしょうか。この世の悪い政治家の圧政をただ指をくわえて見ていればそれでいいのでしょうか。それに対して何も言えないのでしょうか。正しい政治のあり方を聖書から為政者に教えなくていいのでしょうか。為政者のために祈れとはよく言われるものの、それはただやみくもに、為政者がどんな政治をしてもいいからとにかく祈れとの意味なのでしょう。為政者がどういう政治をすべきかを明らかにしながら、その目標に向けて神のみこころにかなった政治をなすよう祈れ、とまでは言う必要は無いのでしょうか。為政者は、聖書が教える基準とは全く別次元の基準で政治をしていいのでしょうか。為政者は神が立てた権威をもとに国家を治めるといふ王権神授論だけがあって、その王がどのように国家を治めるべきなのか、教会は教えなくていいのでしょうか。

そもそも、聖書が教える理想的な国家のあり方とはどのようなものなのでしょう。宗教改革者は聖書から答を見出しました。それがすなわち十戒です。「神と人を愛する政治」のあり方です。そして、これが国家の理想であり、統治者の責任なのです。「神と人を愛する政治」をするのが為政者の責任なのですから、これを行わない為政者に対しては、「神と人を愛する政治」をするよう、教会は為政者を教えなければなりません。そうしないと滅びると預言します。それで、国家の為政者が、例えば、一枚目の板に関して偶像崇拜を国民に強要する場合には、キリスト者はこれに抵抗します。為政者が「神を愛する政治」を行わないからです。フランスや英国では、政府がカトリック信仰を強要したため、これに抵抗した多くのプロテスタントの信者は殉教しました。そして、二枚目の板

に関しては、マルティン・ルターは、国家が不義の戦争を始める時、国民はそれに従う義務が無いことを主張しました。この場合、国民のいのちを守らなければならない統治者が、自分の責任を放棄して、不義な戦争を始めることで国民を無駄に死なせます。それで、「人を愛する政治」をしない統治者に対して、国民には服従義務が無くなります。つまり、抵抗権が生じるのです。16世紀の宗教改革では、カトリック一色のヨーロッパに於いてプロテスタント信仰に目覚めた信者たちは、自分たちの信仰を守り、それを主張して世に認めさせていかなければなりません。そのため、二枚目の板より一枚目の板をめぐる戦いが顕著となります。

二枚目の板(人を愛する政治)のことが問題とされるようになったのは、それより一世紀を経た英国の清教徒(ピューリタン)革命の時代でした。当時の国王ジェームズ一世は、信仰こそ形だけはプロテスタントではあったものの、カトリック信仰のローマ帝国との関わりを失っている英国社会をまとめ上げるには、国王の権威を強化することが必要と考えます。それで、王権神授説を理由に、国王は欲することは何でもできるとして、国民に受動的盲従を強制し、反抗する者は「主に油注がれた者」に逆らうことになることを主張して、次のチャールズ1世の代まで思いのままに国民を処罰する圧政が続きます。中でも、中途半端な政府の宗教改革政策を批判し徹底した改革を主張する清教徒たちは弾圧されました。これに対して、清教徒たちは、「人民の幸福(Salus Populi)」と「自己保存(self-preservation)」のためには一国民といえども合法的に抵抗することができると考えて王権に抵抗します。この概念はもともとコモン・ローヤーであるヘンリー・パーカーの主張ですが、彼は、王の責任が「人民の幸福」の実現にあり、王がその責任を果たさずむしろこれを脅かす場合には、国民は「人民の幸福」と「自己保存」のために合法的に抵抗できると考えます。そして、この考えをもとに清教徒たちは革命を起こして圧政をやめない国王を処刑しました。こうして、二枚目の板に刻まれた「人を愛する政治」を行うべき為政者が自分の責任を果たさない時、国民にはそれに抵抗する権利があることを清教徒たちは明らかにしました。

神はモーセを通して十戒を啓示なさいました。それは「神と人を愛する」教えですが、16世紀の宗教改革者はこれを政治に適用させて、「神と人を愛する」政治をなすことを為政者の責任と理解し、これを怠り、あるいはこれに反する政治をなす為政者に対しては国民はこれに抵抗する権利があることを主張しました。一枚目の板に記された「神を愛する」政治を問題としたのは16世紀宗教改革ですが、二枚目の板に記された「人を愛する」政治を問題としたのは17世紀の清教徒の功績です。

八木隆之先生は、今、英国・スコットランドのエディンバラ大学の大学院に留学しておられますが、そこでもピューリタンの神学を中心に歴史神学をこれから研究なさる予定です。ピューリタンというのは、英国の徹底的な宗教改革を望むプロテスタント教徒たちのことです。ルターによってドイツで始まった宗教改革の神学は、スイス・ジュネーブのカルヴァンに於いて確立します。そのカルヴァン主義の神学が、フランス、オランダ、イギリス、スコットランドの改革に大きな影響を与えます。中でも、エリザベス一世の時代に改革が中途半端に終わった英国では、より徹底した改革を望む人たちがいましたが、彼らのことを清教徒(ピューリタン)と呼びます。英国は、ヘンリー八世の離婚問題で教皇と対立したことが直接のきっかけとなってプロテスタントになりますが、離婚されたキャサリンの娘メアリーが、自分の母が離婚されるのを正当化したプロテスタントと対決することで、カトリック勢力が復活し、礼拝儀式も元に戻り、カトリック司教が司教職に復帰して、カトリックへ復帰します。同時に、弾圧が始まります。改革者たちは次々に投獄され、約290名が火刑に処されて多くの者が各地の牢獄で餓死しました。エリザベス1世の時代になり、彼女はプロテスタント、カトリック両者が満足することを目指します。それで、プロテスタントの側に立ちながらも、同時に包括主義政策を取る形で、イギリス国教会はエリザベス時代に確立を見るのでした。ピューリタンはおよそ三種類に分類できます。一つは、為政者の弾圧を逃れて地下に潜伏しながら改革運動をする者、そして、表舞台に出て正面から革命をする者、三つ目は、それが失敗に終わるや、英国での改

革を断念してオランダや米国に海外に逃亡（移住）する者の三つです。こうしたピューリタン研究は、16世紀の宗教改革が英国の改革にどのような影響を与えたかを知る上で貴重であり、同時に、宗教改革の神学がピューリタンを通してどのように今日に継承されてきたかを知る上でも重要です。アメリカのキリスト教神学はこの延長上にあります。日本の初期に入ってきたプロテスタント神学も大きく関係しています。「札幌バンド」の「バンド bund」はドイツ語で「契約」を意味する用語で、ピューリタン神学を背景としています。また、今日の民主主義もまたこの副産物です。これほど重要な研究課題であるにもかかわらず、日本ではあまり研究する人がいません。その意味で、八木先生の留学は重要な意味を持つと思います。

神は今から約 3,500 年前、出エジプト直後のイスラエルの民に十戒を直接与えましたが、その 40 年後、新たな世代の民にあらためて十戒を教えました。その際、モーセはこう解説します。「主が、この契約を結ばれたのは、私たちの先祖たちとではなく、きょう、ここに生きている私たちひとりひとりと、結ばれたのである。」世代を超え、時代を超えて、神はまさに「私たちひとりひとりに」十戒を教えてくださいているのです。モーセの時代から約 3,000 年後に、その十戒の持つ意味が新たに確認されるや、宗教改革を巻き起こし、さらには清教徒革命を引き起こします。ヨーロッパを二分する改革運動が展開します。神のことは生きているのです。今も生きて働いています。生きて働いて、生身の人間を造り変え、世界の歴史を変えるのです。神は、「きょう、ここに生きている私たちひとりひとりに」今もなお語りかけておられます。

言うまでもありませんが、「神と人を愛する」十戒は今日にも有効です。とりわけ、政治との関わりで言えば、為政者は「神と人を愛する」政治を目指さなければなりません。神社参拝の強要や、学校現場に於ける「日の丸・君が代」の強制といった悪政を許してはなりません。また、不当に国民の平穏な生存を脅かす意味の無い不法な戦争や、同様に国民の生存を脅かす原発製造と稼働を許してはなりません。為政者が「神と人を愛する」政治をなすよう、教会は預言しなければなりません。しかもそれは、あらゆる手段と方法で預言しなければなりません。「神と人を愛する」政治をなすよう為政者のために祈り、文書を通して、請願、抗議行動、陳情、そして訴訟を通して、「神と人を愛する」政治をなすよう、主権者である国民と為政者に預言しましょう。